

堀合先生に学ぶ(2)

頭も体も使って自分からいろいろと考えて、

自分の能力を十分に使うことを願う

上垣内 伸子

「そろそろいろいろ出てきはじめましたよ」という、

堀合先生のことばに誘われて、訪問した五月一日、保育室や園庭のあちこちで、思い思いの活動が始まっていた。先生の子どもへの関わりを中心に、降園まで観察させて頂いた後、何人かの子どもについて話し合う機会を持つことができた。その話し合いの一部をここに再現することで、三歳のこの時期に、堀合先生が、保育の中で大切にしておられることについて考えてみたい。

これまで、保育室のロッカーの中に入っていることが

続いていたりようちゃんが、この日、砂場で、降園まで十二分に砂や水で遊んだ。彼の生き生きとした表情に惹かれた私たちは、このりようちゃんの活動に関することから話し合いを始めた。

立川(以下T)りようちゃんですけど、今日はりよう

ちゃんうまくいくなんで先生は思われるんですか？

堀合(以下H)いいえ、思いませんね。ただね、ゆい

ちゃんが、帰る時だけ、あの人のそばじゃなきゃいや

1. りようちゃんの遊びのきっかけを作る

だと言うんですね。で、あれ、この人知ってるのかな
と思ったら、おにいちゃんだかおねえちゃんだかお
友達なんですね。それでやっとなかりましたから、な
にかというと、いつも椅子を横に持って行って、りょ
うちゃんはここってしてたんです。

昨日は、りょうちゃん泣いたんです。どうも、くた
びれちゃったみたいで。ところが、今日は同じあの中
に入っても、ご機嫌で割合と元気でした。それで、
ゆいちゃんが外へ行くって言ったなら、りょうちゃんも
行くって一緒に行ったんでね、そこからね、始まった
んです。

上垣内（以下K）ゆいちゃんが来るまではずっとロッ
カーの中でしたね。

H そうでしたね。りょうちゃんは、初めは外で遊ぼう
という意識はなかったみたいですけど、ゆいちゃんが
働きかけてくれたから、自分もその気になったみたい
ですね。

T 外へ出ると後はもう全く対等でしたね。むしろりょ

うちゃんの方が積極的に、こうやってと少し世話を焼
いていました。それぞれで座り込んで、バラバラに遊
んでいながら、ゆいちゃんがりょうちゃんの真似をし
たり、あやかちゃん、さとしくんなどいました。

このような時、保育者自身が遊びに誘ったり、遊びを
提案することも考えられるが、そうして保育者が先にた
つのではなく、子どもと子どもの結びつきという、活動
の下地となるようなぎっかけ作りを大切にされていると
感じた。

私たちは、この砂場での遊びを終日観察していた。そ
こで、次に砂場での遊びについて話題が出た。

2. プリンはなかなかできないもの……援助のあ
り方

T 今日、本当にびっくりしたんですけど、プリンとい
うのはなかなか生み出されないものですね。今日の砂
場で出てくるかなあと思っていたら、最後のところ

で、りょうちゃんが、入れ物に砂を入れて水を入れてポロッと落としたひょうしに出来たんです。それを見たりょうちゃんは、足で踏んでいました。

H そう、カップをふせるということは、割合と出来にくいことなのでしょう。

以前は、初めは一生懸命遊んであげて、すつと抜けるというのだったのですけど、この頃は、あの人達、時代だと思いますが、我が強くなってきていて、そうはいかなくなりました。

何しろ自分達にはやりたいことがあって、今日だって、水をジャージャーと、あんななんでもないことが面白いんですね。あんな時、お団子作ってみても見向きもしないのよね。大きい人の方が関心を持っているけれど、小さい人はそれどころじゃないんですね。これをやりたいと思ったら、なんていったってやるんですから。そういう人たちをこちへ向ける必要はないですから。それより、ある時期がくると、「あ、おっこちちゃった」という偶然があるし、自分でやってみ

て形になる場合もあるし、そうやって、全くゼロから出ていっているような気がするのです、この頃は、余りその道を開かないんです。

T プリンにしても、おだんごにしても、子どもが、偶然にしろ、大きい人のまねをしたにしろ、そこまでに至るまでにずいぶんと学んでいるんだと思うんですね。りょうちゃんが、水でビチャビチャとずつとやって、砂を入れてと、さんさん楽しんで、そこで偶然落としてプリンが出来る、その時は興味はないんだけど、何回かやって、そして、今度はもう一つ意識的に作ってみようかってことになるんでしょうね。

こういう活動を、形になるまでを、結構時間をかけながら、自分で考えたり、イメージをふくらませたり、感覚的に楽しんで、砂の性質を感じていくんだなと思いました。

K 感触を楽しむとか、言葉ではなくて砂と会話するかというのは、こういう感じだな、こんなことが大切なんだなと感じました。



りょうちゃんの今日の活動を見ていると、どんどん感覚的になっていきました。シャベルを使っていたのが、そのうち、水をジャージャー、泥を足で、そして手を入れてと、遊びがどんどんプリミティブになって

いきました。これまで体験してきた、おままごとの砂遊びの衣を脱いでいくというか、今日は本当にいい顔をしてやっています。お帰りと呼ばれたときも、りょうちゃんはすつと、手を洗って終わりにしていました。ああ、りょうちゃん今日はいい仕事したんだなあと思われました。

H 今日の方は、割合赤ちゃんほい面と、口とか考えがしっかりしているところとあるけれど、その口に出す考えが自分のものじゃないっていうか、考える過程で頭の動かし方は、非常に幼いように感じます。だからそれだけに、自分、いわゆる人間的な基盤となるものが型にはまっていない。あれを私共が近づいて、あれがいいわよ、〇〇がいいわよと、言わない方がいいんですよ。

T 幼稚園で、じつくりと、その子なりの物に対する取り組み方が許される……見ていてほっとします。文化的なものは自然と身についちゃうんですよ。急ぐことはない。

H そうね、結局言葉にすれば、頭と体を、使う感触を感じながら使っていくということなんでしょうけど。

そのためには、昔は大人と一緒に遊んであげることが大変いいってことだったんだけど、この頃はね、大人が手を出さない方がいいと思うんです。

私は、「一緒に遊ばない」って言うんだけど、そうすると「遊ばないんだ」と、ただうろろうして、監督係みたいになる大人もいる。まあ、そんなふうに外側からは見えるかもしれないけれど、大人が手を出さない方がいいと思うんです。

年齢が進むと、手を出す部分も増えてきますが、自分から経験していくポイントだけは押さえておく。三歳の今は、全く自分のやりたいことをやっていいから、もちろん間違った事はだめって言うけど、それ以外の事は十分にやって、自分の持っているもの全部使って、頭も手も足も全部使って、何を収穫するか判らないけど、これからいろんなことを理解していく上での基を作っていく事が大切だと思います。

久しぶりの三歳の担任で、以前の三歳とはだいぶ違う、どう関わればいいのかとドキドキです。初日の次の日から、どうもこの人達は、逆に関わりすぎると余りよくない、集団生活の中で決まりもだんだん判っていくんだけど、言葉でいうんじゃないくて、自分を十分出していくと、その中で知らない内に判っていくんじゃないかなと。だから今年は余り関わっていません。これまでは、もう少し三歳には関わっていたんですけど、今年はそれをしないようにしました。

T きまりを伝えるより、子どもがリラックスして自分の活動に打ち込めるように、そっちを大事にしていこうと思われたんですね。

H 大人の口を余りはさまないで、あの人たちのやりたいうようにやらせていこうと……どの程度あの人達がやれるのか。どんなに軌道はずしだっていっても、大きい人たちがしたときのようなスケールの大きい事はないですから。今日あたりは、ポカリとやることもできていましたから、そろそろいろんなことがあるんで

しょうけれども。そういう時くらい少し言って、後はやりたい放題くらいがいいんじゃないかしら。でもよく先生も神経を働かせて、だめなことは小さいことでも見のがさないことは忘れたくないですね。

大人から与えられた結論よりも、自分で見つけた事実の方が、そしてそれ以上に、そこへ行き着くまでの過程こそが尊いものであり、保育の中で大切にされることだと、考えておられるようだ。そこで、入園したての三歳児に対して、まず、やりたいことを、自分のやりたいように、心ゆくまでやりきることを保障しようと思われている。そこから子ども達は、自らの発見に喜び、やり遂げた充足感を持ち、それが次の活動への意欲へとつながっていくのだろう。

3. はるちゃんの車庫作り……自分で考えるきっかけを

T 堀台先生が、子どもが遊ぶのに任せるとおっしゃい

ましたが、一つだけ今日の保育の中で、あっと思ったことがありました。保育室の真ん中に、車が散らばっていたんですね。「ああ、ここ車庫にしましょうね」とおっしゃった。そして、積み木を二つ三つ出したら、はるちゃんが、積み木を並べ始めました。あのまま続くとはいなかったのですが、おまけに、女の子まで入って、発展していった。あのとき、私は、先生は片づけられるのかなと思っていたのですが、先生は、一つ置いて、環境を作られた。あれは、あそこに置くと、はるちゃんが参加するかなと予想されたんですか。

H そうですね。あの人は、これまでずっと車で遊んでいて、同じことしているわけね。で、そろそろね。遊びを見ていて、何か一つ、何がどうなるかわからないけれど、ちょっと方向をむけてあげると、そこから変化してあの人は考え出すんじゃないかと。そのことは、いつもしてあげないといけない。いくらやりたい放題でも、そこがないと、遊びが続かない。

でも、三歳は、一般的に、そうすると面白くなくなっちゃうんですよ。そうするとやらないようにする、それで過ぎてはいくんだけれども、今度ははだしで追いかけてみたり、ふざけてみたりね、少し大きくなるとそんな方向にいつてしまう。そうじゃなくて、

たとえ大きくても、たわいないことしてるような時でも、自分がやりたいと思ったらそのことをしっかりとするような人にするには、ちょっと変化するっていうか、考える余地っていうか、道を開けてあげると、その人達がそこから考え出していく、するとそこから面白くなってくるんですよ。

T ちょっとしたきっかけみたいなものを見事に用意していらっしゃるけれど、決して、その子のイメージの先取りはしていかない。けれど、それをやりすぎると、子どもが「先生、その次どうするの」になっちゃう。かといって、イメージの先取りしちゃいけないって言うのと、手を後ろに回して監督係になっちゃう。なかなか難しいものですね。



H 声をかけることも少なくなっちゃったたり。
T どちらかというと、はるちゃんは最初は自分のしたことを一人でウロウロしながらいた子どもでしたよね。その子があそこに座り込んで、あれだけあの積み

木ができる。その上、女の子が参加しても、その子が、どこに積み木を置いて、優しい目で見てる。「そこはダメだー」なんて言わない。きつとゆったりした気持ちになっているんだろう。普通だったら、そりゃだめだーと言うところでしょうけど。

先生は、誰でもじゃなくて、はるちゃんだからこんなきっかけをという具合に考えられるのですか。

H そうですね。人でしょう。そしてその人の機会を考えてでしょう。

T いつも車で遊んでいる……とかいうのがおありになるから、こういう対応が出て来るんですね。

K あの女の子は、なぎさちゃんですが、「よいスタート」という掛け合いや、模倣もありました。初めは、なぎさちゃんの方にイメージがあり、はるちゃんに命令する形でした。そして、はるちゃんの方も「スタート」と言うことが、相手に働きかけるきっかけと気付いたらしく、彼の方から、「スタート」と声をかけ、「遊ぼうよ」という気持ちを伝えようとしている

ようでした。

T なぎさちゃんが入ってきたことで、初めの気持ちより、はるちゃんはもっと面白くなったんだろうと思います。この始まりは、やっぱり、片づけるのではなく、「車庫」という働きかけだったんですね。

堀合先生は、一人ひとりの子どもに対応を常になさっており、援助のあり方や子どもに対する思いは、現象としてみれば、当然一つ一つが異なったものになってくる。けれども、保育者が主導するのではなく子ども自身が気付いていく、自分の頭で考え自らが活動することを通して自己の基盤が作られていく、そのことを大切にするという考えは、共通して底辺に存在している。そして、その働きかけは、常に子どもを深く理解していこうとする姿勢から生まれるものではないだろうか。

(十文字学園女子短期大学幼児教育学科)